

待合室

第1章

建



第1章

目を開いたとき、そこにはなにもなかった。

正確にいうと、見るべきものがなかった。

「目が覚めたのか？」

ふいにそばから声が聞こえた。

声のした方向に振り向くと、中年の男が立っていた。

「ここはどこですか？」

あたりを見渡しながら私は聞いた。

「待合室だ」

と、男は答えた。

「立てるか？」

わたしがよろよろ立ち上がると男は続けた。

「君は死んだのだよ」

わたしは男の返事をきくと、口をぽかんとあけたままよろめいた。

目を下にやって自分の体をみると、わたしの胸元は大きくはだけていた。

わたしは体のラインぴったりの超ミニのワンピースを着て、ペディキュアを塗った足にハイヒールという格好をしていた。

これでは立ち上がるのが難しかったのも不思議はない。

見知らぬ男に突然「死んだ」といわれても、実はあまり驚きはしなかった。

理由はわからないが、うすうすそのことを知っていたような気がしたのだ。

「知っているだろう？」

「人は死ぬと、みんなここの待合室に来るのだ」

そういうと、男はそのまま歩き始めた。

わたしはとりあえずそのまま男についていくことにした。

「ここは何の待合室ですか？」

「あの世への待合室だ」

男は困惑した表情のわたしの顔を見ながら説明を続けた。

「肉体を失くすことを『第1の死』という。

ここにいる連中が経験しているのがそれだ。

しかし、あの世に行くには『第2の死』を経験しなければならない」

「どうすれば『第2の死』を経験できるんですか？」

「『第2の死』は自分自身の力で経験することはできないのだ」

「きみを覚えている人々がきみのことをすっかり忘れたとき、

その時こそが『第2の死』を迎える時だ」

「というと、『第2の死』を経験できるのは、

わたしの知り合い全部が亡くなった時になるのですね」

わたしはおぼつかない足取りで彼についていきながらいった。

「きみの知り合いだけじゃない。

それにはきみ自身が全く知らない、きみを知っている人間も含まれている。

ただし、

彼らが全員死ぬまで『第2の死』を経験できないというわけでもない。

彼らがきみのことをすっかり忘れてしまいさえすればいいのだ。」

まわりの人たちが近づいてきて、わたしをじろじろ見た。

「かわいそうに」「たぶんこれが原因で死んだんだね」

「こんなにかわいいのに」

若い女性は困惑している私の顔を見ていった。

「大丈夫、大丈夫」

「ずっとその姿のままじゃないし、ちゃんと元の姿に戻るから」

それをきいてさらに複雑な表情浮かべるわたしをみて、さらにあわてて付け加えた。

「ごめんごめん！ 余計に混乱させちゃったみたいね」

中年の男が唐突に大きな声で話はじめた。

「きみがこの待合室にいるのは 人々がまだきみのことを覚えているからだ。

つまり、

生きている人間がきみをどんな風に記憶しているかということが

今、ここにいるきみの姿に反映しているのだ。

きみはまだ死んだばかりだから、

死んだ時のきみの姿の記憶が

おそらく強く印象に残っているのだろう」

わたしは男のいったことについてしばらく考えてから

「じゃあ、ここは生きている人たちの『思いや記憶』で作られているのですね」

といった。

「みんなそう考えているようよ」

さっきの女性が口を挟んだ。

「あら、自己紹介もせずにごめんなさい。

わたし、エイミー。 あなたは？」

「あとう、実は名前も何も覚えていないんです。

頭のケガで記憶喪失にでもなったのかしら？

でも、なんとなく、『クリス』という名前に聞き覚えがあるような気がして・・・」

エイミーはわたしをじっと見つめちょっと考え込むようにして

「じゃ、クリスって呼ぶね」といって微笑んだ。

「行くぞ！」

そのときだれかが大声で叫んだ。

「どこへ？」

わたしはエイミーに尋ねた。

「すぐにわかるわ」

わたしは一歩踏み出したところで自分の足につまずいた。

とっさにエイミーがわたしの腕をつかんで支えた。

ハイヒールをはき慣れないようなわたしの足取りをみて

エイミーは

「あなた、本当に女の子なの？」とくすっと笑った。

「自分でもよくわからない。

目が覚めたときから自分の体じゃないみたいで

なんだかおかしいなとは感じているんです。」

「でも、この体からすると女の子のはずなんですけど・・・」

エイミーはわたしの体をじろじろ眺めて

「たしかにどうみても女の子に見えるし、

それも、かなりかわいい女の子に見えるけど」

「だけど、

あなたがさっきいったように、ここは『思い』で作られている世界だとしたら？

そして

あなたの今のその体も『思い』とやらで作られているとしたら？

だとしたら、

あなたの今の体が本当の姿じゃないとしても何の不思議もないかもしれない」

「ひょっとして男の子だったとしても、

でも、そうだとしたら、どうしてあなたは女の子の姿をしているのかしら？」

私は肩をすくめた。

いきなり青空が見えてきて、
気がつく足下には草がはえていた。

周りを見渡すと遠くに森と連なる山々が見えた。

そして

後ろを振り返ってみると・・・

そこには何もない虚無の世界が広がっていた。

森と山々に虚無の世界。

まるで二流小説家が、書いてる最中行き当たりばったりに
考えだした世界のような感じだった。

そこへ、いきなり声がした。

「私の国へようこそ！」

声がした方を見ると、一人の男が立っていた。

「わたしはジョージ・ワシントンだ」

男はそう言うと、にっこり笑って木製の歯を見せた。

～第2章に続く～

第2章は近日公開予定です。